

ふたたび日本における ヘッセ問題について

藤 井 啓 行

私はこれまで既にヘルマン・ヘッセの「再評価」に関し、またそのことと必然的に絡む日本におけるヘッセ受容の問題について若干考えてきたのであったが¹⁾、さらにこの考察を続ける必要を強く感じるので、ここでふたたび該問題を取り上げることにしたい。

現在わが国には、ヘッセ協会を名乗るものが二つ存在する。その一つは、1967年に設立された広島の「日本ヘルマン・ヘッセ協会」であり²⁾、表紙にヘッセの横顔を刷りこんだその瀟洒な装丁の会誌「HESSE」の発行は過去5号を数え、本年はたまたま詩人生誕100年記念に当たるところから、第6号は特輯号として発刊予定とのことである。この会の主宰者は小説『邂逅』などで知られる作家の四反田五郎氏だが、その手になる協会創立の趣意文に、わが国の精神や文化の中心をなしてきた思想を作品の主題とした日本の作家がまれな当節、それを見事に表現した作家がかえってヨーロッパに出現したとして、これを日本人へのきびしい警告であるとともにまた大きな喜びとも感じ、「この『偉大なる兄弟』の名を永遠に記憶し、その業績をしのび、その作品を親しく語りあうために」ヘッセを敬愛する者が相寄って会を発起したとあるのは、よくこの協会の性格を語るものであると言えよう。ちなみに、該協会創立前後の時期のドイツにおけるヘッセ受容の状況を眺めると、1957年に西ドイツで第2次大戦後の頂点に達したのち、関心は急激に極度の下降を示し、Suhrkamp Verlag における

ヘッセの売れ行きは1965年に完全な最低点に達したということである³⁾。

さて協会としての今一つの存在は「北海道ヘルマン・ヘッセ協会」だが、これは先のものより8年遅れて1975年2月に生まれ、会報（『心の旅』）の創刊は翌年9月で、現在までに2号を数えている。なおその創刊号で会長の井手貴夫氏は、『会報の発刊に際して』と題する一文の中で、広島の前記ヘッセ協会のことや、1959年ごろから高橋健二氏がヘッセやゲーテを東京における有志の集まりで講じてきたことに触れたのち、1977年が記念の年に当り、また76年にはヘッセ展が札幌でも開催されるので、これを機縁にして協会設立に踏み切ったと述べている。そして会報のさしあたっての方針は、ヘッセのさまざまな面、とくに従来わが国ではあまりよく知られていなかった側面を重点的に会員に伝えることのようなのである。

井手氏は先に『ヘルマン・ヘッセ研究（第1次大戦終了まで）』（三修社、1972年）を公にしたが、その中で氏は、ヘッセ自身の言う魂とは彼にとって「生命の中に内在するもっとも根元的な促し」であるとし⁴⁾、また「二つの対極のあいだを調和させようとする彼の願いは彼の精神の基調をなすもの」と考えている⁵⁾。そして「自分自身に対して責任をもつ独行者」としてのヘッセの「集団に対する個性の尊重」、「個人の使命観への自覚とそれへの服従」⁶⁾に注目しているが、しかも停滞することなく常により高きものへと目指して止まぬその魂はヘッセが受けついで伝統的な浪漫精神であるとし、そしてこの浪漫的な精神は「老年ヘッセにおいて古典的な高さにまで高められた」⁷⁾と見る立場からは、*Das Glasperlenspiel* の Spiel を、「いわばノヴァーリスの夢みた青い花に至ろうとする努力の象徴」⁸⁾と考えるのも当然と言ってよいであろう。この協会の、会報を含む活動の基盤にあるものも、如上のヘッセ観であると思われる。

以上の協会（いずれも会員は当該地域以外にも広がっている）乃至はそれに準ずるものの活動が国内の諸所に今日見られるのは、日本におけるヘッセ受容を考えるに当って見逃し難い現象であると思うが、さらにこの機

会に触れておきたいものに、一昨年暮から数ヶ月にわたり東京をはじめ日本の諸都市で開催されたヘッセ展がある。それは「生誕100年記念ヘルマン・ヘッセ文学と水彩画の世界展」と称する催しであったが、その際 Suhrkamp の Lektor でヘッセ関係の編集責任者の Volker Michels も、その開催にちなんで、3巻に及ぶヘッセの新しい書簡集の共同編纂者である Heiner Hesse (ヘルマン・ヘッセの二男) と共に来日したのであった。

このヘッセ展はかなり大きな成果をあげたようだが、展示に寄せてハイナーは、日本におけるヘッセの翻訳者や解説者の何人かが、ドイツ語圏の大多数の読者も及ばぬほどヘッセの世界の核心にまで深く通暁していることに触れている。このようにドイツ語圏以外のヘッセ体験がドイツ人たち自身の想到できない側面をも次第に明らかにしつつあることは、第2次大戦後もうかなり以前からドイツ側が自ら認めているところであったようだ⁹⁾。ハイナーはまた、外国語で書かれたテキストを翻訳すれば、その本来の響きや香気、リズムや文体の特色は大部分失われはするが、それだけに、純粹に思想にかかわるものに対しては関心がいっそう強く集中することになり、それゆえ政治や世界観に関するヘッセの省察が、往々にして母国でよりも日本やアメリカで、よりよい理解を得ているのだと述べている。この点についてはミヒェルスも同意見で、アメリカ人の場合を例にあげて、英語に翻訳すると、ヘッセの言い回しのいくつかにおいて、原文に対しては歴史的に付け加わった副次的解釈の不協和音が、訳文からは取り去られてしまうとしている。翻訳されたテキストでは、内容はもはや、個々の表現がその時までを受けてきた一部修正によって歪められることなどはない。たとえば *das Gute, das Wahre, Seele, Geist, Weisheit* などの語は、広告文や流行歌や休日のレジャーへの誘いの文句等々による戯画化をうけて、ドイツ人にとっては往々にして何とも我慢できないような言葉になってしまった。翻訳はその代りに、さきほどのようなドイツ語が

関わりを持つところの、ヘッセのテキストにおける前後関係から判断して、その時代にもっと適合した同義語を訳語として見つけてくる。しかしドイツ語の場合にそのような侵害を度外視することは、誰にでもできるものではない。萎縮して今ではしばしばポンチ絵になってしまったこれらの語彙が、かつて目指したのももう古くさくなっているという、ふつう考えられる受け止めかたにまんまと乗せられないようにするのは、そう簡単なことではないのである¹⁰⁾。イタリアの愛国詩人ガブリエレ・ロッセッティは、紹介者でもあり批評家でもある翻訳家の機能に関して、「翻訳はもっとも直接的な註釈である」¹¹⁾と言ったそうだが、理想的に行なわれた時の翻訳の重大なはたらきについては論を俟たない。

ただこれまでのわが国におけるヘッセの翻訳事情の実際について言えば、文化批判のならびに政治的な著作に関する紹介に多少とも不足する面があったことは否めない事実で、今後の課題としては、そこにも更に積極的に重点をおいていくことを前提として、従来のヘッセ観をも中に含みつつ実りの多い議論を誘い出すような、ヘッセに対する解釈や理解のより意識的な手がかりを見いだすことが求められるのである。そうした問題は残りつつも、しかし日本でのヘッセ受容については、その当初から概してよい翻訳者に恵まれてきたことも特筆に価するであろう。ヘッセを最初にわが国で翻訳した茅野蕭々は感覚の鋭敏な名訳者であった¹²⁾。そしてそれ以来、現在に至るまでまずはよき伝統が続いてきたとすることができる。こうしてヘッセは広汎な読者大衆から迎えられ、また高橋健二氏が『ヘッセ展に際し、ヘッセを思う』という短文の中で述べているように、かつては非現実的なものとしてしばしば冷笑された前述の彼の文明批判や平和主義的な世界観も、徐々に理解されるようになり、このテクノロジーが幅をきかすコンピューター時代に新たな脚光を浴びつつある。

ところでこのヘッセ展を記念して、雑誌『芸術生活』はその1976年1月号で、「ヘルマン・ヘッセの水彩画と文学の世界」の特集を組んだ。ここ

でヘッセの素朴で幻想性に富んだ色彩ゆたかな水彩画の世界が極めて美しい写真版で紹介されたのは、ヘッセのこの種のものとしては日本では恐らくはじめての試みであり、わが国でのヘッセ愛好家にヘッセに対するいっそうの親近感をかきたてた点で、なかなか効果的であったと言えよう。これまでも、ヘッセの水彩画に関しては、原画を手に入れ乃至目にした極く少数の人々は別にして、日本における一般の読者にも、彼の作品の翻訳に時として色付きで添えられた小型の複製で、少しは目に触れることもなくはなかった。たとえば、人文書院の『放浪』（高橋健二氏訳、初版1953年）や、尾崎喜八訳『ヘッセ詩集』（『世界名詩集』第10巻、三笠書房、初版1967年）に挿入された数枚のものなどがそれである。しかし、それらはもちろん原画の持つイメージを辛うじてほんの僅か想像させるに過ぎず、『芸術生活』収載のものとは同列に置くことができない。

このようなヘッセ展が既にわが国でも催されたことは、もちろん本年の100年記念とも絡ませてのものであるが、一昨年にさまざまな行事が行なわれたトーマス・マンならびにリルケのその場合と比較して、ヘッセに関しては、このたびの Jubiläum は一体どのような意味を持つのであろうか。一般の受容と専門のドイツ文学研究者たち多くの評価との食い違いは、日本ではまだ依然としてそれほど縮まってはいないのであろうか。

たとえば今かりに問題をヘッセの詩に限って考えてみた場合、生野幸吉氏は『日本の詩人とドイツ抒情詩』の中で、現在の日本で最も多く読まれるドイツの抒情詩人はヘッセ・リルケ・ハイネ・ゲーテのようだが、「抒情詩人としてはアマチュアというべきヘッセ」の詩が最大の読者を持っているのは、白樺派を思わせる率直な無技巧や翻訳しても理解し易い思想性のためだろうと考えられるが、ドイツ抒情詩の流れから見ると「誤解に近いかかなり奇異な現象」であると述べている¹³⁾。ところでヘッセの詩の数多い一般の愛好者のことは別としても、テーマを日本の作家へのヘッセの影響ということに限定した場合、それは小説家よりも詩人に対してのほ

うが大きいとすることができる¹⁴⁾。その際ただちに思い浮かぶ名前は片山敏彦と尾崎喜八であろう。

ヨーロッパの文学と文化一般に広く深い教養をそなえ、自分がヘッセに近い人間であることを感じていた詩人片山は、渡辺勝氏によれば、単なる感傷詩人とする第2次大戦前のヘッセ観にも、傍観者的作家であるとして片付ける大戦中のヘッセ観にも、いっさい関わらず、ヘッセの感傷の底に「深い本源的な憧れ」と「純正な魂の真摯さ」を見たのであった。ヘッセが読者を深く感動させるその高さは貴重であり、またヘッセの場合それは「独自の親しさに包まれた高さ」である。そしてヘッセが常に直面する仄暗い死の背景の中から浮かび出てくる高貴な精神と人間性とに支えられた「晴朗なメルヘンの世界」こそ、その真骨頂である¹⁵⁾。ヘッセとの関わりにおける片山についてこれとほぼ同様の趣旨を述べているのは『ドイツ文学とその時代』における山下肇氏だが、氏もまた、「死をおそれない騎士的精神の晴朗性」をこそ『ガラス玉遊戯』の精髓と見た。そして第2次大戦下の日本にあっては、そのような晴朗なメルヘンは川端康成や堀辰雄や太宰治などの文学において照応して現われたが、これらの澄明な文学の世界がどれほど不屈に洗練を維持して外界の夾雑物から守らねばならなかったかということをよく考えて、そのことの秘密を最もよく説きあかし続けたのは、ヘッセを一番早い時期に正統的に日本に伝えた片山敏彦であり、彼の著作集が今日ふたたび静かに読みひろげられつつあることを、真のヘッセ・リバイバルと結び付けずにはいられないと記しているのである(1972年5月)¹⁶⁾。このように渡辺・山下両氏によって限りなく称揚される片山は、第2次大戦が酷であった或る朝ヘッセから直接贈られてきた *Müßige Gedanken* と題する詩に、感激して次のように述べている。——「数年のあいだ全地球を包んだ戦乱の苦悩が去り、しかもなおこの巨大な悲劇の試煉のきびしさを身に浴びている現在、ヘッセの詩集を再び繙いてみて私は感じる——人類史の未曾有の変革と倫理および信条の夥しい

権威失墜ともかかわらず、これらの詩は今も依然としてほんものの輝きを失わないことを。いな、心が苦しみに洗われて虚妄の霧を払い落した今こそ、ヘッセの詩作の美しさと同価値とはいっそうすなおにわれわれの心に受けとられる」¹⁷⁾。(1946年2月、『詩心の風光』収載)

次に詩人尾崎喜八とヘッセの二人に共通するところは、両者が共に率直・平明な言葉で、万物の母である自然と渾然一体を目指しながら、ゆるがぬ個性への強い信頼と人間性に寄せる深い愛をたたえる歌をうたい続けたということであろう。尾崎はヘッセに私淑する気持をこめて、独学で身に付けた深いドイツ語の力に頼り、彼自ら訳詩集(既述の『ヘッセ詩集』)を出している。そしてその「解説」において彼が、たとえばヘッセの初期の詩で、イタリアへの旅の折に書かれたと思われる *Giorgione* について、「私は日本の詩人たちが、彼らの若い日にこれだけ充実した、これだけ美しく力強い詩を書いたのを読んだことがない」¹⁸⁾と記したり、また1911—18年の詩群に寄せて、「あの大战中にこれほど共通の苦悩と精神の悪闘への慰めや勇気づけの歌を書いた詩人を私は知らない」¹⁹⁾と述べたりしているのを見る時、どれほど二人の魂が照応しているかを私は感じ取ることができる。中でも、その題がすでにヘッセ的である尾崎の詩集『旅と滞在』(1933年)の中的一篇『夕べの泉』は (*Hermann Hesse gewidmet*) と添書されているが、これは際立ってヘッセを思わせる作風である。5節から成るこの詩の第1節と最終節は次のようになっている。

君から飲む、
ほのぐらい山の泉よ、
こんこんと湧きこぼれて
滑かな苔むす岩を洗ふものよ。

……

君から飲む、
あすの曙光をはらむ甘やかな夕べの泉よ。
その懐妊と分娩との豊かな生の脈動を
暗く涼しい苔に跪いて乾すようにわたしは飲む。

ここには何よりも、流れるようなヘッセ的な情感に応じるものがある。尾崎が今ひとり深く尊敬したリルケは、どこまでも実存の底へ底へと深く迫っていったが、尾崎もヘッセも、そのような或る意味において不遜な道は歩まず、諦念に徹して、言わば神の手に一切をゆだねようとする賢明なつつまじやかさを持っていたと言えそうである²⁰⁾。

ヘッセの詩については更に、ロマン・ロランがヘッセから詩集 *Musik des Einsamen* (1914) を贈られて、「あなたはリート天才力を持っています。あなたの言うことはすべて、単純で心の奥から語っている」と返書を送り、またその日記に、「ヘッセの詩にはドイツの古い大きなリートの音楽と魂が漂っている。静かな魂の深く単純な歌だ」と記したことも思い合わされるが²¹⁾、このことといい、また前の片山や尾崎の発言といい、先述の生野氏のヘッセ観と或る点までは共通の見方を示しつつ、そこから先の評価に関しては互いに齟齬するところが妙で、これは一例にすぎないが、しかもまたヘッセの捉えかたについては極めてしばしば生じてくる問題の象徴的な現象例でもあり、この評価の落差をどう考えればよいのかは、依然として大きな課題としてあり続けるわけである。

ところで「誤解」ということに関しては、日本でのヘッセのそれについて種々のことが考えられると思う。

まず頭に浮かぶ問題の一つは「ヘッセと東洋」ということだが、時としてヘッセの場合と比較されるトーマス・マンを考えると、そのインド的・仏教的雰囲気はインドないし仏教そのものとはまるで違ったものになっていることは、誰の目にも明らかである。またロシア的「東方」とイン

ド的東方とが造作もなく一致するところに、近頃のドイツに一般的な「東方」の特色を見ることが出来る。この点がヘッセにおいてはどうかというと、直接的な東方体得はマンとは比較を絶して豊かであるのに、その「東方」も、根本的な特徴においては結局マンのそれと似通ったものであると言わざるを得ない²²⁾。

次にヘッセはわが国において、第2次大戦の前から戦中に引き続き戦後にも多くの読者を得るという幸運に恵まれたが、戦後に及んで彼は、中学校での国語の教科書に取り上げられ、その作品は推薦図書にもなった。かつて少年の日何としても詩人になりたいと思ったばかりに学校では手に負えない生徒として白眼視されたヘッセが、今では殊に『車輪の下』などとともに年少の中学生たちの心に刻みこまれ、少なくともその名を知らぬ生徒は一人もいないと言ってよいまでになっているのは皮肉である。そして更に『ペーター・カーメント』や『青春は美わし』などに読み進んでゆく者が多いと思われる。作家の藤本義一氏は、ヘッセでは『車輪の下』と『カーメント』の2冊しか読んでいないが、ヘッセが作品の主人公たちのこういった人間の生きざまの観察を自分の中に残してくれたことはたしかであると言²³⁾、また同じく作家の柏原兵三が、ヘッセの作品に初めて接して心を動かされたのは中学2年の時で、おそらく最後の国定の国語教科書にのっていた高橋健二氏訳の短編『少年の日の思い出』(Jugendgedenken)を読んだ時だと述べているのは²⁴⁾、その点で目にとまることである。

この自伝的な作品『少年の日の思い出』は、ドイツでも随分しばしばギムナジウムの教科書に取り上げられたものであり、これは、蝶の採集に凝っていた主人公の少年が、優等生の友人の持っている珍種の標本を見せてもらっているうちに、どうしても欲しくなり、とうとう或る時それをポケットに入れて盗み出し、家に持って帰ったという内容だが、この事件を通じて、感じ易い少年の心の微妙な動きを詩的に捉えた好短編である。私も

一度ドイツ語の授業で、その本文ならびに作品解釈を教材に用いたことがあった。そしてあとでレポートの作成を課した時に、意想外に学生の反応が活発で、一般にその内容についても深く考えているのを知って心に感じたのを覚えている。しかし、実はあとで分ったことだが、この作品は今も中学の国語教材に使われているのであった。最近の朝日新聞で、次のような内容の記事が私の関心を呼んだ²⁵⁾。

それは或る中学校の国語の時間でのことだが、この作品を読んだあと、先生は、小学生のとき自分も食べ物盗んだことがあるという体験談をした。その大部分が盗みを経験していた生徒たちは、ヘッセの作品と先生の話にひかれ、授業はとて盛り上がったものになったように見えた。そして先生は次回の授業でこの物語の感想をもう一度作文に書かせたが、作中の優等生の友人に対しては、「人間味がない」などと生徒たちの非難が集中した。主人公への同情も多かった。主人公の母親が子供に自分で始末をつけるように言ったことについては、この母親はえらいとの一致した評価である。だが、先生の最も強い期待を裏切って、盗んでしまったあとの主人公の心の痛みや、友人に謝りに行く時の堪えられないほどの屈辱感など、盗みという行為にからむ内面的な問題は、全く子供たちの注意をひかなかったようである。

ヘッセを受けとめる少年の多数の鑑賞眼が、その程度からあまり進歩しないで終るのでは無論ない。大学在学中にまでヘッセの作品を読み進めてくる少なからぬ数の学生たちのうちでも、この作家と真剣に取り組もうとしている者は、最近の資料や研究を踏まえて多角的な捉えかたをしつつあり、無害で衛生的な青少年向きの読物、現実の政治には背を向けた白樺風の理想主義的なオールドファッションの抒情派作家などといった、先入観と早計から成る先人の貼り付けたレッテルなどには容易に惑わされない頼もしさをそなえている。ヘッセの多くの作物を虚心に真摯に読む時、彼を単に清純感傷型の甘い詩人や、また一時代前のヒッピーなどに結び合わせ

て無造作に処理するというようなことは、到底困難だと思えてくる筈である。あるいはヘッセ自らをもって言わしめれば、愛と情熱を賛美する唯美的浪漫精神の旗手として自ら星董派をもって任じたと思える、かの与謝野鉄幹ならずとも、むしろその派の果敢な徒であることに誇りを抱くかも知れないのであるが。

森本哲郎氏は小塩節氏との対談の中で²⁶⁾、戦争中の昭和17・8年頃でも、文化人や学生などの世界では、ヘッセを読んでいないのは若者ではないといった空気がどこかにあり、その頃に較べると今のわが国でのヘッセの読まれかたは、アメリカなどの場合と違ってむしろずっと地味なのではないかという印象を述べている。たしかに高等教育が大衆化し、表面的なものにせよ読書人口が飛躍的に大きくなっていると思われる今日、それに伴ってヘッセの作品の翻訳出版を促す購読者数も著しく増していることは紛れもない事実だが、いわゆる「ヘッセ・ブーム」などという現象は、私自身にも特に感じられたことが一度もない。「ヘッセを愛好する学生は以前から常に変わらず多いな」というのが私の感想だが、ただヘッセを通じて彼らの目指すところは徐々にしかも絶えず変化してきているという実感はある。しかしヘッセを好む出発点にあるものは、根本的には時代を超えて変るところがない。すなわちドイツ人一般に特徴的な非常な理屈っぽさ、晦渋さ、やたらと観念をむき出しにしての世界の構築など、そういったものをヘッセは殆んど感じさせず、しかもそれでいて紛れもない「ドイツ的」な Gemüt をもって人間の感性に訴えかけてくるのである。その点において彼の魂は南国へと開かれた モーツァルト 型で、「ドイツ的」でありつつ、日本人の目から見れば、純血種のドイツと言うよりこれを超えていて、その点が、日本的感性には親近感をおぼえさせるのである。ヘッセの本当の問題性は実はそれ以後のところにあるわけだが、しかし筆者とて、ヘッセという作家に最初少しでも心をひかれる切っ掛けになったものとしては、このような事情もかなり大きくはたらいていたことを告白しなければなら

ない。今は手許にないので正確さを充分には保証しえないが、戦後2年にして生まれた日本独文学会がまず発行した機関誌『ドイツ文学』の創刊号に、たしか作家の長与善郎だったと思うが、日本では殊の外フランス文学などが好まれているが、たとえばヘッベルの戯曲などにうかがえるような、日本的なものとは大変異なる北方の金属的で硬質のドイツの文学にもこれからは大いに目を向けてゆく必要がある、というような趣旨のことを述べていたのが、30年後の今も妙に印象に残っている。そして当時学生だった私も、西欧の文物ではやはりどちらかと言うとフランス的なものの方に多く気持が傾いていて、この長与の文章を心に強くとどめつつ——現在の私はこれに完全に同感である——、結論的には、自分の本来の好みとはかなりずれがあるのを感じざるをえなかったのであった。

日本でヘッセが読まれる場合、その好まれる点がアメリカなどと違ったところを持つのは、当然のことであると言えよう。ヘッセが日本の読者、殊にその中心的な存在である青年に愛される理由として、小塩節氏はまずその文章に着目している²⁷⁾。つまり、その用語と文体が平易で素直であり、決して力むことなく、日常の言葉を用いて平明な文章を書いていると言うのである。この点についてはミヒェルスも、ヘッセの書いたものをあのように広い読者層に普及させているものは、書かれている言葉のわかり易さだと認めているのだが、しかし彼はまた、それはただ一見単純であるというに過ぎず、実はそれは容易には達しがたい素朴さであり、この素朴さには、ヘッセが体験した事柄の自明さと、その習得した明確な具象性とが具わっているとし、つまりヘッセにおける単純さは極めて意識的なものであると考えている²⁸⁾。これはまことにその通りで、平易であるからと高を括って臨むとその固い歯ごたえにたじろぐのは、私自身が幾度となく経験するところであり、読む者の資質に応じて高低いかようにも変じうるのが、その文章の特質と言えるのではあるまいか。その際生ずる翻訳の問題についてはすでに若干触れたが、作家が120パーセント含めたものが、

翻訳のやり方次第では80パーセント伝わるとするとこれだけでも充分で、要はその訳文が翻訳として優れているかどうかが問題なのであり、翻訳でも外国人が喜んで理解できるような作品が実は最高級のものであるという考え方も可能であろう²⁹⁾。まことに翻訳の問題は文学作品の際は特に重大であり、私なども、同じヘッセの作品が訳者の相違によって著しく異なった印象を読者に与えることがある——誤訳等のことは全く別にしても——のは、頻りに経験するところである。そして或るヘッセ愛読者の述懐の中で、ヘッセへの憧れと同様に、その作品の訳者の詩に充ちた訳文が自分を常に魅了したが、その訳者によってヘッセを臚げながら知っていたのであるだけに、自分の中のヘッセは訳者その人を除いては存在しないと言ふことができるといった言葉に接する時³⁰⁾、思半ばに過ぎるものがある。

さてヘッセが日本の青年に好まれる第二の理由は、作中の登場人物が概して自然的で、共感を寄せやすいということである。そしてそれと絡んで、自然への深い愛情ということもあげられるであろう。そして第三は、これはアメリカとも共通の、高度に発達した産業社会と密接な関連のある現代の危機の問題、またそこに置かれた個人としての若者の問題と言ふことができる。

ヘッセに限ってみた場合、日本の青年の読書傾向は、多くの例において若者の自我形成にとっての順当な姿を示しており、先にも述べたとおり、一時の流行現象的なものは殆んど見られない。その中でもとりわけ、青年の自我の追求、内面世界の究明という点で『デミアン』の占める位置は特異のものであり、数ある翻訳文学作品の中でも、何故にこの小説が常にかくも多くの青年男女の心を強く捉えるのかと、もともと精神分析の要素が深く絡んだ「母」のイメージなど極めて難解な問題を含むものであるだけに、私など正直なところ、そのたびに首をかしげているような始末である。しかも大学生を例にとると、この作品に打ちこむのは近年はむしろ女子の側に目立って多いというのが私の印象で、これまた驚きの種である。そし

て30歳の或る女子会社員が、『デミアン』の中のあのあまりにも有名な一つのイメージを踏まえて「私は卵の中の鳥になった」と記した文を⁸¹⁾、私など読んで目を瞠るのだが、実は統計などによると、わが国の青年が文学を読む目的は一般に人間または人生の探求であり、文学作品から、生きてゆく上の精神的ならびに感情的な糧を得ようとしているのであって、とくに女子学生の場合その関心を強くひくのは、人間としての生き方に本気になって取り組んでいる作家や、愛情における深刻な問題を捉えた作品であるとすれば⁸²⁾、私などむしろ己れの不明を恥じるべきかも知れない。

若い人たちの述懐を更に追い続けるならば、たとえば先の女子社員は、19歳の時『荒野の狼』にすさまじい衝撃をうけて、「そこには、他の誰でもない、この私自身がいた。ハリー・ハラーは、これまでの、ひいてはこれからの私だった」と言い、また23才のさる自由業の男性は同じく『荒野の狼』について、それは「私自身の顔を私に示してくれた。……手にしたヘッセの書は、子供の頃読んだ『車輪の下』のヘッセのイメージを払拭して余りあった」と述べている⁸³⁾。またヘッセが、その幼い日々を送った川と山とにはさまれた森の中の小さな故郷の町への深い愛を絶えず歌いながら、生涯を通じてさすらいの喜びと悲しみとを語り続けたのも真実であり、内に不屈な精神の強靱さをひめながら、本当の人間らしくあることを願って自我の内面の世界への旅をひたすら続けたのであるならば、26才の無職の女性の、「ヘッセから異郷へ放浪することを誘われ、また故郷への懐古を促された」⁸⁴⁾と言う言葉にも、真実の声の響きを聞き取らねばならない。ヘッセが特に親近の情を抱き続けた浪漫派末期の詩人アイヒェンドルフは、ヘッセと同じく冷静な現状批判の精神と真の愛国心を持ち、また青年たちにゆるがぬ信頼を寄せていたが、その彼もまた作品 *Taugenichts* において、縛られた現実の世界を超越して、それによく対抗しうる自由で解放的な世界の存在あるいは建設を夢み、そこに魂の真実の故郷を思い描

いたのであった³⁵⁾。

文学とは、人間の心の中にあって一番われわれの語りたいものや聞きたいものを、そのまま文字の中に直接表現することで、感激こそが文学の生まれ出る源泉であり、あくまで自分一人が徹底的に感じ取ることこそ文学に対する唯一の正道と言うべく、受容の仕方に自信がないというのは、つまりぶつかったものへの反応が弱いからであるとするならば³⁶⁾、以上を見た限り、日本におけるヘッセの現在の受容のありかたはかなり健康的な方向に進んでいるものと判断してよかろうし、日本の青年がヘッセを愛読するのは、往々にしてドイツ人に首を傾げさせるような単なるセンチメンタリズムなどではなさそうである。勿論かつてのわが国におけるヘッセ愛好にも誤解のみがあったとは言えるものでなく、初期の彼はやはり、形を変じつつも後期の彼の中に含まれて続いてはいる。ただヘッセその人は時代と共にまた作品と共に絶えず発展し続けていったのに、あまりにも感傷的な捉えかたやまたそれに対する反動が生まれたりして、従来とかく問題があったとすれば、それは、わが国では「おのれの趣向に合うヘッセのみを愛し過ぎてきた」³⁷⁾と考えられることではなからうか。自戒しなければなるまい。

ヘッセを考える上で重要なことは、『シッダルト』の主人公が、沙門の世界と訣別しゴータマとも袂を分って、初めて現実の自然の美しさに成心なく触れ、新鮮な感動に打ち震えたように、ヘッセ自身が自我と世界との多面性の、絶えずその中に没入して心ゆくまで生の豊かさを味わいつくしながら、しかも他方では、往々誤解されるような甘い感傷に溺れてむというようなことはなく、それを超越し冷めた目で客観的に批判する主体としてあり続けたことである。これこそがまたヘッセ自身の多元性なのだが、相対立する両極を不断に統一にまで高めようとするその精神のありかたは、真に強靱で高貴なものであると言わねばなるまい。そしてその表現は『ガラス玉遊戯』において一つの頂点に達したと見られる。「死をおそれない

騎士的精神の晴朗性」³⁸⁾こそこの小説の精髓と言うべく、今後はわが国でも、このような象徴的・理念的な作品に強く目を向けてゆくことが是非とも必要であるように思われる。

一般に外国の作家の名声の変動に関する問題は、国際的な立場で文学をとらえようとする研究者を深く悩ませる問題で、興味をそそのものであるけれども、また容易には解きがたい謎に包まれている。一人の外国の作家の書いたものがわが国にはいつてきて、人々に読まれ鑑賞され解釈され影響を与えてゆくその跡を辿ることが文学研究の問題となりうるのならば、おそらくその問題の究極的な意味は、その作家の作品を中心にして生まれてくるさまざまな解釈や評価などから、「その作品を生んだ国と受けとった国との集団的民族心理をあきらかにしたいと願うこと」³⁹⁾というようになるのであろう。そしてその課題に立ち向かう武器としては、「作家と作品と読者、さらにはこれらをつつむ歴史的現実といったもろもろの要因からなる複雑な文学現象を対象とする」⁴⁰⁾ところの、今日「文学社会学」(Literatursoziologie)の名をもって呼ばれるものの力も必要になる筈である。いずれにしても、日本と西洋との関係という極度に困難な課題を扱うに当っては、いたずらな体制迎合は避け、ひとりひとりの研究者の十分な納得を経た実感と体験に基かなければならないであろう。

注

- 1) 『ヘッセの再検討に寄せて』(独逸文学19号, 1974年), 『日本におけるヘッセ問題』(関西大学文学論集, 1975年, 創立90周年記念特輯), *Die Rezeption von Hermann Hesse in Japan (Rezeption der deutschen Gegenwartsliteratur im Ausland, Kohlhammer Verlag 1976, 所載)*.
- 2) 三修社『基礎ドイツ語』1975年3月号所載の拙文紹介参照.
- 3) Eike Middell: *Hermann Hesse. Die Bilderwelt seines Lebens*, Leipzig 1975, S. 9—10参照.
- 4) 同書499頁.
- 5) 同書558頁.

- 6) 同書572-3頁。
- 7) 同書582頁。なおヘッセとドイツ浪漫主義との関係については、彼が「浪漫主義者たちとの永遠に交らぬ盟約締結を表明した」(Felix Lützkendorf : *Hermann Hesse, als religiöser Mensch, in seinen Beziehungen zur Romantik u. zum Osten*, W. Rumpelstin 1932, S. 28) のは事実だが、ヘッセを目して、Hugo Ball のあのよく知られた「浪漫主義の最後の騎士」という表現を安易に適用するのは、今日では大いに問題がある。たとえば、「実際ヘッセほどに、現代の詩人作家のうちで、ドイツ浪漫派の伝統と純粋性を守り続けてゐるものは、他には絶対に存在しないのである」(秋山六郎兵衛『ヘッセ研究』、三笠書房、1941年、29頁) というような表現には、多くの誤解を生む種がある。この問題については、他日稿をあらためて触れたい。
- 8) 同書564頁。
- 9) 山下肇『ドイツ文学とその時代——夢の顔たちの森——』(有信堂、1976年)、186頁参照。
- 10) Volker Michels : *Sprache* (Februar 1972) 参照。
- 11) 中村保男『翻訳の技術』(中公新書、1974年、第2版)、59頁参照。
- 12) 小塩節『ヘッセは青春の文学』(月刊誌『芸術生活』1976年1月号所載、32頁)参照。
- 13) 中央公論社『日本の詩歌』第28巻『訳詩集』(1969年、初版) 所載、387頁参照。
- 14) 渡辺勝『ヘルマン・ヘッセ』(教育出版センター『欧米作家と日本近代文学』全5巻のうち第4巻ドイツ篇、1975年、所載、274頁) 参照。
- 15) 上掲書267-8頁参照。
- 16) 同書194頁参照。
- 17) 『魂の贈りもの』(片山敏彦著作集第5巻『さまよえる客』、みすず書房、1972年、所載、175頁)。
- 18) 同書249頁。
- 19) 同書253頁。
- 20) 中央公論社『日本の詩歌』第17巻『堀口大学・西条八十・村山槐多・尾崎喜八』集、340-3頁参照。
- 21) 高田博厚『ロランとヘッセ』(前掲『芸術生活』) 所載、50頁) 参照。
- 22) 藺田香敷『ドイツ文学における東方憧憬』、創文社、1975年、27頁参照。ただし論文の該当箇所の最初の発表は1954年である。なおヘッセと東洋との問題に関しては、筆者はすでに注1記載のものの中で論じたので、ここではこれ以上触れない。
- 23) 隔月刊誌『レジャーアサヒ』1974年2・3月号 (特集「ヘルマン・ヘッセの世界」)、68頁参照。
- 24) 『青春の書』(高橋健二他『ヘッセへの道』、新潮社、1973年、所載、309頁)参照。
- 25) 1976年6月18日ならびに19日付朝刊『いま学校で、中学生』欄参照。

- 26) 対談『いま、なぜヘッセか?』（前掲『レジャーアサヒ』所載）参照。
- 27) 前掲『芸術生活』31—2頁参照。
- 28) 前掲 *Sprache* 参照。
- 29) 朝日新聞1977年1月3日付朝刊所載のドナルド・キーンと安部公房の対談『日本語・日本文学・日本人』参照。
- 30) 前掲『レジャーアサヒ』所載の生方たつゑ『ヘッセへの誘い者』参照。
- 31) 前掲『芸術生活』64頁参照。
- 32) 中島健蔵他編『比較文学——目的と意義——』（清水弘文堂『比較文学講座』第1巻），1971年，129—31頁参照。
- 33) 前掲『芸術生活』66頁。
- 34) 同63頁。
- 35) 石丸静雄『予感と現在——詩人アイヒェンドルフの生涯——』（郁文堂，1973年），278頁参照。
- 36) 島田謹二『日本における外国文学』下巻（朝日新聞社，1976年，初版），590—3頁参照。
- 37) 渡辺勝『ヘルマン・ヘッセ』（前掲書所載，271頁）。
- 38) 前掲『ドイツ文学とその時代』194頁。
- 39) 前掲『日本における外国文学』上巻，15頁。
- 40) 山戸照靖『文学社会学的方法』（片山良展他編著『文学の基礎理論』，ミネルヴァ書房，1974年，所載，152頁）。

取り扱う問題の性質上，直接引用ないし参照に供した文献は，以上に見られるとおり，その殆んどすべてを敢えてわが国のものに限ったことを断っておきたい。なお本文に用いられた日本の人名のうち，故人については敬称を略した。

Hesse in Japan (2)

Hiroyuki Fujii

In Japan gibt es heute zwei Hermann-Hesse-Gesellschaften, eine in Hiroshima (seit 1967) und die andere in Sapporo (seit 1975), die Vereinsberichte bzw. Jahresschriften herausgeben, und eine ähnliche Gruppe in Tokyo (seit etwa 1959). Sie machen alle

auf mich den Eindruck, daß sie sich lebhaft betätigen. Ende 1975 bis 1976 wurde in Japan eine Hesse-Ausstellung für längere Zeit in Tokyo, Nagoya usw. mit Erfolg veranstaltet, und um diese Zeit sind mir ferner beide Hesse-Sondernummern außerliterarischer japanischer Zeitschriften aufgefallen. Diese mahnen mich zusammen an den hundertsten Geburtstag des Dichters im Jahre 1977.

Was man von einem „Hesse-Boom“ oder einer „Hesse-Renaissance“ sagt, dürfte bei Hesse-Freunden in Japan wohl nicht zutreffen. Bei ihnen ist die Sache in manchen Beziehungen eine ziemlich andere als etwa bei den Amerikanern. Hier bei uns ist Hesse nämlich seit mehr als vierzig Jahren ununterbrochen beliebt, und zwar wegen seiner tiefen Neigung zur Natur und zur Innenwelt, seines nicht „vollblütigen“ Deutschtums und auch seines von guten Übersetzern den Lesern vermittelten ungekünstelten und klaren Stils. Darin haben sich die hiesigen Verhältnisse nicht im wesentlichen gewandelt. Aber es ist auch eine unbezweifelbare Tatsache, daß viele der japanischen Hesse-Freunde jetzt ihre große Aufmerksamkeit auf die Bemühungen Hesses um eine gefestigte Subjektivität in dieser hochentwickelten Zivilisation richten. Nur wird eine Distanz der meisten japanischen Hesse-Leser gegenüber symbolistischen und ideellen Werken Hesses wie „Glasperlenspiel“ Anlaß zur weiteren Diskussion geben.

Andererseits kann ich einen bekanntermaßen noch immer etwas auffallenden Gegensatz zwischen den Hesse-Bewertungen der breiten Leserschaft und vieler der Germanisten in Japan nicht übersehen, und ich möchte diesen Gegensatz noch weiter von verschiedenen Gesichtspunkten aus betrachten, um auch eine kollektive Psychologie jedes der beiden (deutschen und japanischen) Völker zu ergründen.